

# 西明寺系立像十二天像の研究

## －真長寺本図像復元を中心として－

"A Study of the "Twelve Devas" hanging scrolls in Saimyo-ji style:  
Focusing on a proposed reconstruction of the original "Twelve Devas" hanging scrolls owned by Shincho-ji."

---

阪 野 智 啓

BANNO Tomohiro

The "Twelve Devas", a set of twelve hanging scrolls owned by Shincho-ji, includes four original Kamakura period scrolls, along with eight Edo period scrolls in a different style. The acclaimed original four scrolls are similar to "Twelve Devas" hanging scrolls owned by Saimyo-ji, designated as national important cultural properties.

This study aimed to reconstruct the missing eight Shincho-ji scrolls by drawing outlines of the figures, comparing the Saimyo-ji scrolls with similar scrolls owned by Shogaku-in, Osaka City Museum and Hohju-in.

A detailed comparing investigation reveals that all of the figures on the Osaka City Museum scrolls are identical to those on the Hohju-in scrolls while the Saimyo-ji scrolls has slightly different characteristics. Therefore, the Shincho-ji scrolls were reconstructed based on the Osaka City Museum scrolls and the Hohju-in scrolls, which appear to be more representative of the Saimyo-ji style scrolls.

This reconstruction study of the original Shincho-ji scrolls, which are believed to be the oldest among existing similar scrolls, would be meaningful for tracing the development of the "Twelve Devas" figures.

キーワード：・立像十二天像 (Image of Standing Twelve Devas)

- ・鎌倉時代 (Kamakura period)
- ・西明寺 (Saimyo-ji)
- ・真長寺 (Shincho-ji)
- ・復元図 (a reconstruction)

## 1. 真長寺本十二天像の周辺

### 1) 真長寺本十二天像

三輪山真長寺は岐阜市の北東端に構える古刹であり、その寺宝に本研究で取り上げる「十二天像」(鎌倉時代、以降真長寺本、第1図)がある。ただ真長寺本「十二天像」は、十二幅で一具とする図像のうち、鎌倉時代制作の当初のものは四幅しか現存せず、それ以外の八幅は江戸時代の別系統の像が充てられており、像容が不整合となっている。しかし当初本四幅は、国指定重要文化財の滋賀県西明寺蔵「十二天像」(鎌倉時代、以降西明寺本、第2図)と図像的に近似しており、明快な色彩と肥瘦の強い線描、相貌の繊細な描写などの筆法に優れた秀作である。この真長寺本「十二天像」については、筆者が以前に「真長寺本十二天像の模写研究」(愛知県立芸術大学紀要第38号、2008年)において、類似本が複数あることを確認した。

そこで本研究では、これまでに収集した西明寺類似本(本稿では仮に西明寺系図像と呼ぶ)と、平成22年以降に新たに調査した西明寺系図像の資料を加えて、西明寺系十二天像の図様変遷を比較・検証し、技法や図像的特長を整理することをひとつの目的としたい。また収集資料の整理手段として、真長寺本欠損八幅の図像を復元し、十二幅の全容を白描画で起こしていくことも試みる。真長寺本の全容復元を勘考するのはひとえに描写が優れているためであり、あくまでも所感にすぎないが、西明寺系図像のなかでも最も古い作例にあたると思われる。類似本の図像を体系的に捉え比較検証し、図像全容を想定することで、真長寺本、あるいは西明寺本の制作背景を何う手がかりの一つになればと考えている。

### 2) 真長寺本の現状

十二天像は四方四維と日月天地を守護する天部から成り立ち、それぞれ帝釈天(東)、火天(東南)、閻魔天(南)、羅刹天(南西)、水天(西)、風天(北西)、毘沙門天(北)、伊舎那天(北東)、梵天(天)、地天(地)、日天(日)、月天(月)で構成される。真長寺本十二天像では、このうち閻魔天、風天、日天、月天が当初のものであり、残りの八天は制作年代も作風も異なる二系統の図像で補填されている。当初本四幅や後補本八幅に種字はなく、そのためか縦の寸法が西明寺本に比してやや小さい。作風の異なった、しかも別系二種で穴埋めされた経緯ははっきりとせず、十二天揃いで一具とする十二天像の性質から、その三分之二を失っている真長寺本が注視されることはこれまで殆どなかった。ただ先述した自身の先行研究から、重要文化財である西明寺本と酷似していることが判明しており、失われた真長寺本八幅の像容が伺えるきっかけとなった。

真長寺本すなわち西明寺系図像の十二天図は、鳥獸や毛氈を台座とする座像ではなく、平安後期以降定番となった立像である。執行頻度の高い灌頂に必須の法具であるため立像十二天像の作例は多く、鎌倉時代のみならず室町時代以降の作例も多く遺されている。立像十二天像の古いものでは屏風仕立てになり、代表作である東寺本や、図柄が東寺本よりも古様とされる聖衆来迎寺本はいずれも屏風装で現存<sup>1</sup>しているが、真長寺本は掛幅装となっている。立像十二天像の像容は定型化されているものの、真長寺本の月天や風天等の容姿は大きく様相を異にしており、真長寺本、つまり西

明寺系図像は東寺本などの系統に属しない独自の像容形態を持つものと考えられる。

## 2. 西明寺系図像

### 1) 西明寺系の立像十二天

西明寺本と図像の近似する立像十二天像は、これまでに真長寺本を含めて四本確認できている。確認した順に紹介すると、真長寺本（岐阜県岐阜市）、正覚院本（石川県羽咋市）、大阪市立美術館本（旧東楽寺本、大阪府）、宝珠院本（愛知県名古屋市）があり、不揃いながら永平寺本（福井県吉田郡）が所持する「二天像」も同系統の図像の可能性もある。西明寺系図像の像容の特徴は、鎌倉様式を代表する東寺本や聖衆来迎寺本との相違点から見ると次のようになる。

- ①月天が右斜めに構え、両手で蓮華座月輪の茎を捧げ持つ
- ②風天が右を向き、天衣が向かって左上で翻り輪をくぐる
- ③帝釈天が独鈷杵しか持たず、左斜めを向き、袈裟を着ける
- ④日天は東寺本とほぼ同図像だが、月天と共に踏割蓮華座に立つ
- ⑤水天は聖衆来迎寺本と立ち姿が一緒だが、宝剣を握りしめる
- ⑥火天は聖衆来迎寺本にやや近いが、右手第一手や火焰を異にする

これらの特徴を通覧すると、以前に中野玄三氏によって指摘<sup>2</sup>されていることではあるが、西明寺本は東寺本と聖衆来迎寺本を入り混ぜた形式のように見える。また風天の形状では、東寺本をはじめとする多くの風天が概して左を向いているのに対し、西明寺本は右を向くことも示唆されている。これについて十二天像の図像を定める『白寶口抄』十二天法下風天事には「其幡端白右飄飄、左拳又腰向左遙視」とあり、また『阿婆縛抄』図像九七風天の項に「其幡向左飄颺、左拳又腰向左遙視云」とあるため、右を見ている西明寺本はこれらの図像集や儀軌に反している。この右向き風天は他系統ではあまり見受けられず、西明寺系図像を判別する基準となる。

また風天の他にも、東寺本、聖衆来迎寺本では見られない描写も存在する。蓮華座に立つ月天、日天も別系統ではあまり見られない描写である。水天は聖衆来迎寺本とほとんど相違点はないが、別系統では宝剣を持つ右掌の中指から小指を開いているのに対し、西明寺本ではしっかりと握りしめている。他に唐服の上に袈裟をつける帝釈天も珍しく、柳澤孝氏が紹介した青蓮院旧蔵本<sup>3</sup>などわずしか作例が無い。火天は聖衆来迎寺本と似ているようであるが、念珠を持つ右手第一手が下がる点や、伸び上がるような火焰光、相貌などは大きく異なるため、西明寺本独特の描写といってもよいかもしれない。しかもこの特徴を備える火天は、西明寺系図像のなかでも西明寺本でしか見られない。この他にも、西明寺系図像の中に西明寺本だけが備えている特徴を持つ図像が数種あるので、この問題も合わせて他項で詳述する。まずは、このような特徴を示す西明寺系図像の類似諸本について、それぞれの特徴を整理していく必要がある。

## 2) 西明寺本

本系統を代表する西明寺本であるが、描写は極めて堅実であり、瓔珞、臂釧などの装身具や持物の形状は他のどの作例よりも均整がとれている。ただ真ん中に芯が通ったような姿勢の良さと、着衣線描の均斉性が高いためか像容の伸びやかさには欠ける面がある。聖衆来迎寺本と同じく蓮華座に乗った種字を掲げ（東寺本では毛氈座）、若干青みのある虚空に明るい色調でまとめられている。

装束の様子は、日天や地天には地紋に団花紋を組み合わせたやや古風な柄も見受けられるが、全体的には金泥模様が目立ち、毘沙門天や伊舎那天、水天などの様相は南北朝時代前後に見受けられる表現に近い。中でも毘沙門天の筆致は南宋時代の制作と想定される「韋駄天像」（泉涌寺、第3図）に通じるものがある。また羅刹天の着衣にはあまり類例のない縦縞文様（第4図）が見える。この裂のような柄は風天の着衣にも現されており、同系統の中でもこれらの神将形の荘厳性は際立って高い。

## 3) 正覚院本

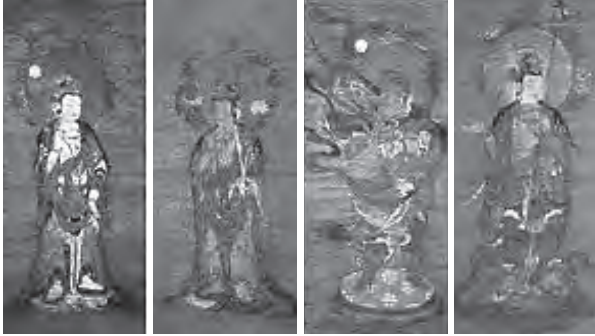
石川県羽咋市にある正覚院は高野山真言宗の寺院で、もとは能登国一宮、気多神社の神宮寺であったという。同寺が所蔵する十二天像（第5図）には、仏画では珍しく落款と筆者年齢の記載があり、日天と月天に「藤原長谷川信春廿六歳」と書かれ、能登在住時代の長谷川等伯が永禄七年（1564）に制作したことが判る貴重な作例<sup>4</sup>である。

像容は西明寺系の特徴である右向き風天、斜めに構える月天、持物の少ない帝釈天等の図像を示しているが、種字が無く、また日天、月天が踏割蓮華座ではなく氈氍座（くゆざ）に立っていたり、火天や風天の相貌が東寺本に近かったりと、細部に相違が認められる。火天、風天ともに老相だが、どちらかというと端正な顔立ちの多い西明寺系の画像にあって、この長谷川等伯の手になる正覚院本の翁表現は古様に沿っておりやや異質である。また火天については西明寺本と腕の構成が全く異なっている。他にも帝釈天の冠と羅刹天の頭髪が、西明寺本と合致していない。

全尊像の火焰光の隙間に、青系の顔料によって暈しが入れているが、これは真長寺本、西明寺本にも部分的に確認できる表現である。ただ真長寺本、西明寺本は朱と群青を配しているのに対し、正覚院本では群青と思われる青系に統一されている。虚空はどうやら無彩色で、尊像の賦彩は丹の鮮烈な橙色と淡い群青を用いた縹色の組み合わせを活かした配色となっているが、渋みのある群青や、草汁による隈取表現を多用していることによって色調そのものは落ち着いた。また、天冠の部分や胸飾などの金物、毘沙門天の宝棒などが、金色ではなく緑青で現されている点も注目される。

## 4) 大阪市美本（旧東楽寺本）

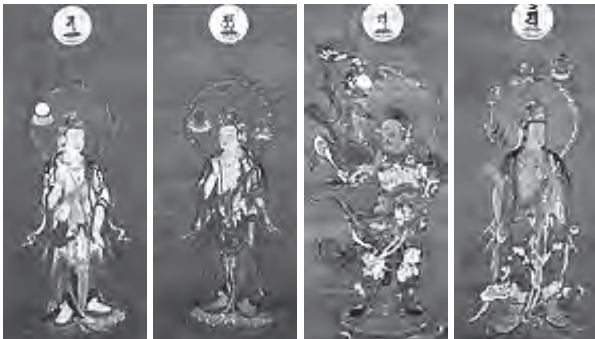
現在大阪市立美術館に所蔵されている十二天像（第6図）は、箱の裏書と掛幅裏に「東楽寺」と墨書<sup>5</sup>され、正徳六年（1716）に東楽寺の住持が買い求めた旨が記され、かつては同寺に所蔵されていたことが判るが、それ以前の伝来については明らかではない。全体的に痛みが激しく、絹本そのものにも歪みがあり図像の判別し難い箇所があるものの、右向き風天、蓮華座に立つ月天、日天



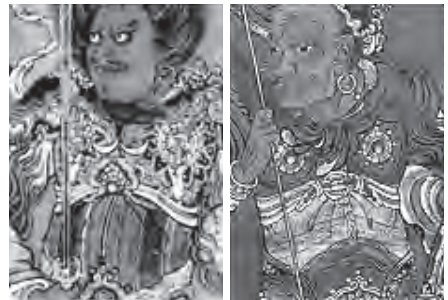
第1図 十二天像のうち月天、日天、風天、閻魔天（真長寺蔵）



第3図 毘沙門天（西明寺蔵）韋駄天像（泉涌寺蔵）



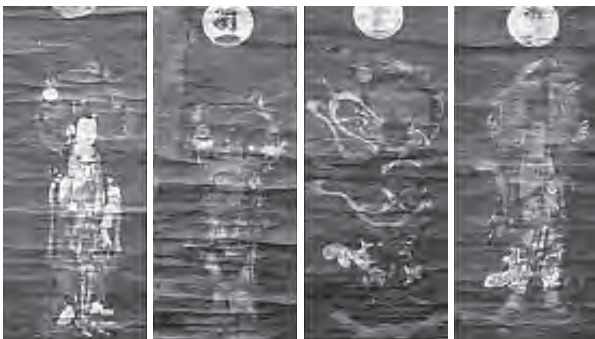
第2図 十二天像のうち月天、日天、風天、閻魔天（西明寺蔵）



第4図 羅刹天、風天（部分、西明寺）



第5図 十二天像のうち月天、日天、風天、閻魔天（正覚院蔵）



第6図 十二天像のうち月天、日天、風天、閻魔天（大阪市立美術館蔵）



第7図 火天（左：西明寺蔵、右：福島県立博物館蔵）

をはじめとする西明寺系の特徴をはっきりと確認できる。細微な相違点としては、まず日天の日輪、月天の月輪にそれぞれ金烏と兎が描かれており、確認している西明寺系図像では大阪市美本だけにみられる描写である。加えて、大阪市美本では梵天が荷葉座に立っている。また虚空が濃褐色をしており、これほどまでに暗い色調の虚空表現もまた他作例にはない。正覚院本で指摘した火天、帝釈天、羅刹天の西明寺本との相違点については、大阪市美本もまた同様に異にしており注目される。

描写は闊達で筆勢があり、その他の西明寺系図像が穏当な筆致でまとまっているのに比べて、大阪市美本では伸びやかな火焰光や黒目の強い相貌表現など、アクの強さを感じさせる。また長い爪を伴う指の描写時には、指関節が過剰に膨らむ傾向がみえる。各天の肉身色は暖色系が特に強く、入念に施されている隈取り表現などは、この大阪市美本のみに見られるものである。ただし目立った文様表現は大阪市美本でも見受けられない。保存状態は良好とはいえ、かつての修理によって虚空が切り詰められ、足下に余裕のない尊像もある。

### 5) 宝珠院本

宝珠院は愛知県名古屋市にある真言宗智山派の古刹寺院で、名古屋三弘法（善光寺、弁天寺）に挙げられる。名古屋大学文学部美学美術史研究室が1991～92年に調査した「名古屋市の仏画調査<sup>6</sup>」に掲載されていた「右向き風天」の写真が調査のきっかけとなった作例である。宝珠院本の描写は、相貌に硬さがあり筆致もやや粗さがあるものの、瘦肥の効いた線描によって破綻なく容姿を描き上げている。粗絹に描かれる室町時代の作例と考えられており、金色部分に裏箔を用いずに控えめな調子となっている。虚空は無彩色となり、尊像は寒色系を基調にいくぶんあっさりとしていて、着衣の装飾や文様も少な目だが、毛氈座の柄には幾何学文様や唐獅子牡丹が濃密に描かれている。種字はなく、尊像の上下に三個ずつ法輪を配し描き表具のようにしている点もほかの作例には見られないが、像容は件の風天をはじめとした西明寺系図像を示している。

また像容について、正覚院本、大阪市美本で見られた西明寺本との相違がある火天、帝釈天、羅刹天は、ここでも西明寺本と異にする。さらに大阪市美本にあった荷葉座に立つ梵天も備えており、像容が西明寺本のみ異なる事例が増えたわけである。

## 3. 西明寺系の比較

### 1) 西明寺本の特異性

ここまで見てきたように、風天や月天の像容に特殊性のある西明寺系図像では、実は基点としていた西明寺本だけが備えていない図像的特徴があることが明らかになった。その相違をまとめると、以下ようになる（表1）。

	帝釈天	火天	閻魔天	羅刹天	水天	風天	毘沙門	伊舎那	梵天	地天	日天	月天
西明寺本	ト - 4	シ - 78	ト - 2	ト	シ - 2	サ	ト - 2	シ - 2	ト	ト	ト - 5	サ
真長寺本	欠損	欠損	ト - 2※	欠損	欠損	サ	欠損	欠損	欠損	欠損	ト - 5※	サ※
正覚院本	ト - 49	ト - 47	ト - 2※	ト - 8	シ - 2	サ - 8	ト - 2※	シ - 2	ト	ト※	ト※	サ※ - 5
大阪市美本	ト - 49	ト - 78	ト - 2※	ト - 8	シ - 2	サ	ト - 2※	シ - 2	ト - 5	ト※	ト - 5※	サ※
宝珠院本	ト - 49	ト - 78	ト - 2※	ト - 8	シ - 2	サ	ト - 2※	シ - 2	ト - 5	ト※	ト - 5※	サ※

(表1) 西明寺系図像の像容比較

煩雑な表となってしまったが、数字はそれぞれ、

－ 1：衣の翻り － 2：天衣の掛け方 － 3：足の形 － 4：持物の形 － 5：座の形 － 6：顔の向き  
－ 7：腕の動き － 8：髪形 － 9：宝冠 ※：その他

と違いを表しており、表中※印は大きな違いではないが、例えば天冠帯の垂れ方や甲冑の意匠などの細かい違いがあった場合の目印である。またカタカナはト＝東寺、シ＝聖衆来迎寺、サ＝西明寺のことで、基本的には東寺本を基準として各尊像の図柄を分類している。従って、たとえばト－29と表記がある場合、東寺系の図像であるが天衣と宝冠の形状が相違していることを表現している。

こうしてみると、風天の形状は一致しているが、そのほかの尊像は些細な違いまで拾うと、西明寺本の図様のみが水天、伊舎那天以外では悉く異なる様相を呈していることになる。制作年代が戦国時代に下る正覚院本には火天や梵天に齟齬が見受けられるが、大阪市美本と宝珠院本は全尊像が一致するため、西明寺本がやや異質な存在になってしまう。ここから判断すると、広く知られている西明寺本の図像は同系統の基本形態ではなく、どうやら改変が加えられているようである。

## 2) 相違する火天

西明寺本が同系統の中でもやや特異な像容を持っていることを確認したが、特に火天は大きく容貌を異にしている。西明寺系図像と位置づけしている大阪市美本、正覚院本、宝珠院の諸本では東寺系の像容を示しているのに対し、西明寺本は念珠を右手第一手で持ち、左手第二手で笹杖を高く掲げる聖衆来迎寺本、いわゆる古屏風様の図像を採っているのである。

また西明寺本の火天では、他の西明寺系図像の諸本では持たない三角印を捧げ持っている。火天における三角印は、三角火印、智火印とも呼び火の燃える形や熱苦を焼亡させる智慧を象徴すると考えられるが、空海が請来した『金剛頂瑜伽護摩儀軌』の火天像容について「四臂、右手無畏、第二手持珠、左手仙杖、第二手執軍持」とあり三角印について記述が無く、「十天形像」（鎌倉時代、醍醐寺）や東寺本では儀軌に則り描写が無い。しかし現存最古の十二天画像である鳥獣に座す西大寺本（平安時代）や、後七日御修法に用いられた東寺旧蔵の十二天座像（平安時代、京都国立博物館）、空海請来本を基にする『仁王経五方諸尊図』（南北朝～室町時代、東寺）中の立像火天、類例の稀な奈良博本立像十二天（鎌倉時代）、東寺系に属する広隆寺本立像十二天<sup>7</sup>（鎌倉時代）では三角印が描かれ、更に鎌倉時代の図像集『覚禅抄』や『阿婆縛抄』でも三角印の記載が複数認められる<sup>8</sup>ことから、三角印を捧げる火天図像の方がより流布していたと思われる。よって西明寺本火天は、粉本では本来東寺本と同じく三角印を持たない図像であるところを、何らかの事情でその必要性が生じ、腕の位置や持物を聖衆来迎寺本に合わせて改変したものと考えられる。

このような西明寺本の古屏風様火天と同一の図像を示す作例として、福島県立博物館本<sup>9</sup>（第7図）がある。この作例は、筆法が真長寺本と似ていたため調査対象としていたのだが、西明寺系図像の基準のひとつである風天が、版本系十二天像を左右反転させたような図像であったため、西明寺系図像とは判じなかった作例である。ただ月天が両手で蓮華座月輪の茎を捧げ持ち踏割蓮華座に立つことや、荷葉座に立つ梵天、炎髪の羅刹天など西明寺本や同系統に通じる図様を備えており、また

毘藍座を包まず立ち上るような火焰光を持つ火天なども像容を同じくしており、まったくの別系ではないかもしれない。

### 3) 帝釈天、梵天、羅刹天

火天ほどの大きな違いではないが、帝釈天と梵天、羅刹天もまた一見して西明寺本のみにも相違点を確認できる。帝釈天では、西明寺本は東寺本等でもよく見かける角冠を被っているが、他の同系統本では天冠をつける。儀軌では冠についての特段の指示は確認できず<sup>10</sup>、もともと角冠形がより流布していたと思われるが、西明寺系図像が天冠になっている事情は類推できない。

梵天では、東寺本のように上位の天部として蓮華座に立つものもあるが、西明寺本では毘藍座に立っており、このように毘藍座に立つ梵天も決して珍しくはない。ところが西明寺系図像のうち大阪市美本と正覚院本では荷葉座に立ち、ここでも西明寺本との差違が現れている。また羅刹天では、西明寺系図像の中で西明寺本のみが炎髪となり、外見上で像容の違いがはっきりしている。

火天をはじめとした諸図像に、西明寺本だけが西明寺系図像の像容からずれを生じているのに、この系統の図像を「西明寺系」と呼ぶのはややこしいのだが、研究の端緒となった同系統唯一の国指定重要文化財であるので、本稿では引き続き西明寺系図像と呼びたい。

### 4) 蓮華座の月天、日天

火天や帝釈天、羅刹天のような西明寺本だけの相違点ではなく、西明寺系図像全体の特筆すべき像容として、月天、日天が踏割型の蓮華座に立っていることが挙げられる。東寺本では、天部として上位にある梵天は蓮華座に立つが、その他はすべて毘藍座であるし、聖衆來迎寺本では全尊像が毘藍座となっている。西明寺系図像のように月天、日天が踏割蓮華座に立っているのは異質<sup>11</sup>である。ただ東寺本系統でも、広隆寺本系の月天、日天は踏割蓮華座に変更されており、このような月天、日天への改変例が他に無いわけではない。しかし広隆寺本は東寺本と同図様を示すが毛藍座に統一されず、月天、日天、地天、閻魔天が踏割蓮華座、梵天、帝釈天が荷葉座、水天が龜にそれぞれ立つなど様々な図様が混在しており特殊な事例となるため、やはり蓮華座に立つ月天、日天は特異なものであると言える。

## 4. 真長寺本白描復元

### 1) 真長寺本の像容

これまでの西明寺系図像の特質を踏まえた上で、改めて真長寺本について注視してみると、現存する当初本四幅のうち風天は西明寺本と同図像であるのに対し、月天、日天、閻魔天は細部を確認すると前掲の(表1)のように、天冠帯について西明寺本以外の図像と一致することが判る。

本研究では西明寺系図像を読み解く手段のひとつとして、同図像系統でも筆致の古い真長寺の欠損幅を白描復元することも試みている。現存する当初本四幅の特質と、この白描画の復元根拠を列挙することで西明寺本と西明寺系統の図像の相違点や特徴を整理していきたい。(◇:現存、◆:白描復元)



## ◇月天（現存）

- ・**天冠帯**：天冠から垂れ下がる紐が、西明寺本では腰のあたりで左右に広がって見えるが、真長寺本を含めてそれ以外の同系統ではそもそも描かれていない（第8図）。
- ・**頭光の火焰**：真長寺本では朱、青の炎が交互に組み合わせられるが、西明寺本では青い火焰で統一される。これは東寺本月天の火焰も青いので、西明寺本が東寺本に倣っているのかもしれない。ちなみに正覚院本、大阪市美本は赤、宝珠院本は青で統一されており、交互に配するのは確認できる範囲では真長寺本だけである。
- ・**天衣の表現**：真長寺本は緑青で現されているが、西明寺本では線描のみ、つまり透き通った天衣として扱われている。これは、大阪市美本も白線のみで描き表わしているので、西明寺本だけにみられる表現というわけではない。
- ・**踏割蓮華座**：西明寺本では左右で緑、赤で描き分けるが、真長寺本では朱で統一される。褪色があまり判別し難いが、大阪市美本も描き分けているように見えるので、真長寺本はある意味単調にしている観がある。

## ◇日天（現存）

- ・**天冠帯**：月天同様に、西明寺本では見られる腰のあたりで左右に広がる紐が、真長寺本では確認できない。
- ・**頭光の火焰**：通常赤い火焰のものが多く、真長寺本では輪郭線は朱色だが炎は群青色に見える。大阪市美本では、風天と同様に赤、青の火焰が交互に配される。

## ◇風天（現存）

- ・**相貌**：右を向き、天衣が頭上で大きく翻る異形の風天であるが、真長寺本は傷みが激しく、相貌が大きく乱れている。
- ・**頭光の火焰**：真長寺本の火焰は青で統一され、炎の隙間を朱色でぼかしているが、西明寺本は透き通ったような赤い火焰と、その隙間に群青を配している。この火焰は尊像に比べて控えめな彩色になり、頭光そのものに透明感を感じることができる。ちなみに、大阪市美本ではこの2本を折衷したような体で、やや薄めに赤、青二色の火焰が盛っている。
- ・**甲冑の意匠**：細かく色分けして謹直に各意匠が描かれている西明寺本に比して、真長寺本は描写がおおらかで飾り金物の意匠も大振りとなる。彩色は裏箔による金色表現を中心に、わずかに布部分だけ着色している。

## ◇閻魔天（現存）

- ・**天冠帯**：西明寺本で見られる、向かって右に飛び出る天冠帯が真長寺本にはない。大阪市美本ほか、同系統諸本にも飛び出る天冠帯はなく、月天、日天でも同様であるので、腰の左右に紐を配する形式は西明寺本独特のものであろう。これは東寺本において天冠帯が左右に広がる図像が複数あり、

西明寺本はこれを模していると思われる。

#### ◆帝釈天（白描復元）

- ・**宝冠**：西明寺本では宝冠が東寺本や聖衆来迎寺本のような角冠になっているが、そのほかの諸本はすべて天冠となっている（第9図）。よって西明寺本だけが古様に沿って角冠に改変した可能性があり、復元図は通常为天冠を被る像容とした。

#### ◆火天（白描復元）

西明寺本の火天が他の西明寺本系統諸本と像容を異にし（第10図）、古屏風様に沿っていることについては前述のとおりである。ただ相貌や筆致は大阪市美本とよく似ており、西明寺本は、三角印の必要性から腕の動きだけを聖衆来迎寺本に近づけたように見える。従って、真長寺本の像容は、西明寺本のような身体表現をとりつつも、腕の配置は諸本のような東寺様に倣ったものになるはずである。

- ・**右手第一手**：胸前で三角印を持つが、真長寺復元案では笹杖を高く掲げる。
- ・**右手第二手**：念珠を持ち腕を下げるが、真長寺復元案では水瓶を持つ。
- ・**左手第一手**：笹杖を掲げるが、真長寺復元案では施無畏印とする。
- ・**左手第二手**：腰のあたりで水瓶を持つが、真長寺復元案では念珠を持つ。

#### ◆羅刹天（白描復元）

- ・**頭髮**：西明寺本は炎髪だが、諸本に合わせて復元案では髻到天冠とする（第11図）。

#### ◆水天（白描復元）

西明寺本の着衣に緊密に文様が施される点を除けば、同系統では像容に相違は無い。

#### ◆毘沙門天（白描復元）

- ・**天衣**：西明寺本では甲冑の両肩口に掛けられる天衣が、その他西明寺系諸本では右肩のみに掛けられている（第12図）。これは、東寺本、聖衆来迎寺本がともに両肩口に天衣を掛けているため、これに西明寺本が倣ったものと思われる。

#### ◆伊舍那天（白描復元）

文様の粗密はあるものの、伊舍那天では西明寺本と諸本では像容の相違点はない。ただ西明寺本では、緑色の伊舍那天の肉身の隈取に補色である朱色を用いており、異形の天部を強調<sup>12</sup>している。

#### ◆梵天（白描復元）

天部の中でも上位にある梵天であるが、立像十二天の図像ではその他の天部に合わせて毛氎座に立

つことがあり、聖衆来迎寺本はそのように描かれている。西明寺本と正覚院本はおそらくそれに倣って毛氈座に立つのだが、大阪市美本、宝珠院本では荷葉座に変わり、梵天の特殊性を表している（第13図）。ちなみに東寺本では蓮華座に立っているが、西明寺系図像では蓮葉となりやや控えめな観がある。正覚院本は氈氍座に立つが、そもそも正覚院本では全尊像が氈氍座で統一されているため、おそらく大阪市美本に近い像容に属する真長寺本は荷葉座に立っていたのではないだろうか。

・**座**：毛氈座に立つ西明寺本に対して、復元案では荷葉座とする。

◆地天（白描復元）

・**天冠帯**：西明寺本で左右に広がる帯が、真長寺本では向かって左の片方にしか確認できない。



第8図 月天（左：西明寺本、右：真長寺本）



第9図 帝釈天（左：西明寺本、右：宝珠院本）



第10図 火天（左：西明寺本、右：大阪市立美術館本）



第11図 羅刹天（左：西明寺本、右：正覚院本）



第12図 毘沙門天（左：西明寺本、右：宝珠院本）



第13図 梵天（左：西明寺本、右：宝珠院本）

## 2) 西明寺本の位置

真長寺本復元に際して、図像の細部にいたるまで類似本を比較検討することで、西明寺本は特異な風天や月天、日天を備える立像十二天像の系統のなかでも、さらに異質な図像になることが改めて確認できた。西明寺本だけが持つ、その他の西明寺系図像との相違点について改めて整理すると、

- ・腰付近で左右に広がる天冠帯（東寺様）
- ・火天において、右手第一手に三角印を持たせ、左手第一手で笹杖を掲げる（聖衆来迎寺様）
- ・炎髪の羅刹天（東寺様、聖衆来迎寺様）
- ・角冠を被る帝釈天（東寺様、聖衆来迎寺様）
- ・毘沙門天の両肩に天衣が掛けられる（東寺様、聖衆来迎寺様）
- ・朱隈のある伊舎那天
- ・毛氈座に立つ梵天（東寺様、聖衆来迎寺様）

と、以上のような点が挙げられる。西明寺系図像との対比で、これだけの相違がみられるのである。以前にも述べたように、西明寺本は西明寺系立像十二天像の像容としては異質なものであり、正調西明寺系ともいふべき像容を持つのは、大阪市美本や宝珠院本と考えてよいのではないだろうか。西明寺本は部分的に東寺本や聖衆来迎寺本に近寄せたかのような食い違いを見せているため、本来は正調西明寺系図像を参考に制作が進められていた西明寺本は、何らかの事情で注文主から像容の改変を求められ、一部は古様に寄せて変容した図像とも考えられる。特に三角印を持たせる火天は恣意的であるし、角冠を被る帝釈天や炎髪の羅刹天などは意図的に東寺様に合わせたように見えるので、注文主のそのような意向が反映されたのであろう。

よって、以上の推測が許されるのであれば、西明寺本に先行する正調西明寺系図像があったはずであり、大阪市美本や真長寺本は、その描写から正調西明寺系のより古い図像に属す可能性がある。

## 3) 正調西明寺系図像

以上の検証を基に、2章で示した西明寺系図像の特徴を再検討すると、「火天は聖衆来迎寺本にやや近いが、右手第一手や火焰を異にする」としていたが、火天は西明寺本特有のものであるから修正する必要がある。さらに西明寺本以外に見られる図像の特徴を加えて、以下にまとめたものが正調西明寺系図像の特質ということになる。

- ① 月天が右斜めに構え、両手で蓮華座月輪の茎を捧げ持つ
- ② 風天が右を向き、天衣が向かって左上で翻り輪をくぐる
- ③ 帝釈天が独鉈杵しか持たず、左斜めを向き袈裟を着け、角冠を被らない
- ④ 日天が、月天と共に踏割蓮華座に立つ
- ⑤ 水天は聖衆来迎寺様と立ち姿が一緒だが、宝剣を握りしめる
- ⑥ 火天は東寺様に近い像容をとるが、火焰光が毛氈座を包まない
- ⑦ 羅刹天の頭髪は炎髪ではなく鬚を結う
- ⑧ 梵天が荷葉座に立つ

- ⑨ 毘沙門天の天衣が右肩にしか掛からない
- ⑩ 天冠帯が腰のあたりで左右に広がらない

かなり些末なことまで列挙したが、このような図像的特徴を持つ立像十二天像が鎌倉時代から室町時代にかけて流布していた可能性がある。二天しか現存していないが右向き風天が確認できる永平寺本や、画中画ではあるが、橘寺本「聖徳太子絵伝」（重要文化財、室町時代）のうち興嚴寺破却の場面で、取り壊される宝塔の扉に西明寺系風天が描かれている作例も散見することができる。またこの系統の図像が確認できた地域が、京都、奈良ではなくその周辺や、愛知、岐阜、福井、石川といった中部、北陸地域で発見されていることも興味深い。火焰光や筆致が正調西明寺系に近似した火天が、オークション雑誌『古裂會』に掲載されていたのをたまたま見つけたことがあり、近畿から中部、北陸地方を調査すれば、まだまだこの系統の図像は見つかりそうである。

以上のように、重要文化財である西明寺本と真長寺復元白描画を軸に、立像十二天像の西明寺系図像が存在する点について検証し、特に同系統の中でも西明寺本に独自性あるいは像容改変があることを推測してみた。作例や図像集の検討など至らぬ点も多く、まだまだ検討の余地のある問題も残したままであるが、今後も真長寺本をはじめ岐阜県や北陸に残る十二天像を基点に、地域性など新たな視点が見いだせないか調査を期したいと考えている

【真長寺本白描復元図】



(帝釈天)



(火天)



(羅刹天)



(水天)



(毘沙門天)



(伊舎那天)



(梵天)



(地天)

## ⑧注記・引用・参考文献

- (1) 東寺本十二天は、建久二年（1191）宅間勝賀によって描かれた、瘦肥の著しい線描が目立つ宋画風による鎌倉新様式の立像十二天像。聖衆来迎寺本は、『東宝記』にいう「古屏風」様の像容にあたと考えられている。
- (2) 中野玄三『続日本仏教美術史研究』思文閣 平成 18 年
- (3) 柳澤孝「青蓮院旧蔵の立像十二天図について」『国華』823 号所載 昭和 35 年
- (4) 宮島新一『長谷川等伯』ミネルヴァ書房 平成 15 年
- (5) 『大阪市立美術館蔵品選集』大阪市立美術館 昭和 61 年
- (6) 宮治昭『名古屋市の仏画調査記録（上）（下）』名古屋大学古川総合研究資料報告 平成 5、6 年
- (7) 参考：広隆寺本「火天」（右図、広隆寺、鎌倉時代）
- (8) 『覚禅抄』：（胎蔵図云）「右手手掌持三角壇当心」、（具縁品云）「心置三角印口持珠及澡瓶」、（釈云）「当心三角印」、（三蔵儀軌云）「四臂、右手手掌持三角壇当胸」  
『阿婆縛抄』文永十二年（1275）：（大日経義釈）「当心有三角印」、（調定図）「四手各持仙杖、澡瓶、數珠、智火印」、（秘蔵記）「左手持仙杖、右智火印」
- (9) 福島県博本の火天は、単に腕の位置や持物が一致しているだけではなく、その容姿は明らかに聖衆来迎寺本ではなく西明寺本に近似性がある。全体的に傷みが激しく、一部尊像では画像が確認しがたいものもあり惜しまれる。
- (10) 『覚禅抄』寿永二年（1183）～建暦三年（1213）帝釈天「金色三目。首戴宝冠。被璪襦袢。右手執独鈷…」
- (11) 井出誠之輔『日本の美術』418「日本の宋元絵画」至文堂 平成 13 年、北沢菜月「寧波仏画」の居場所（『聖地寧波』奈良国立博物館図録所収）平成 21 年、柳澤孝「仏教絵画」（『在外日本の至宝 1』所収）毎日新聞社 月天、日天は占星術信仰の隆盛から、鎌倉時代以降に日月二天の尊格が高まったことが中野玄三氏によって指摘されているが、西明寺系の月天像容については、南宋仏画の『阿弥陀三尊像』（京都・清浄華院）のうちの勢至菩薩像や、『三仏諸尊集会図』（京都・満願寺）の脇侍菩薩、『阿弥陀三尊来迎図』（大阪・個人蔵、神奈川県立博物館「宋元仏画」1997 図録収録）に近似しており、これらの図像の影響のもとに蓮華座の月天、日天が勘案されたのかもしれない。また星宿図では、『九曜七星降臨図』（ボストン美術館、南北朝時代）の上部に描かれた北斗七星の中に、日天を模したような貪狼星が描かれている。貪狼星は図像集『覚禅抄』妙見菩薩神呪経によると赤黒色で右手に日輪を持つとされる（「西南第一月輪描貪狼星、小赤黒色、右手持日」）が、色はこれに一致せず白身の菩薩形に描かれている。また、道教神のように描かれた月を持つ巨門星をはじめ、その他の諸星は毛氈座に立っているのに対して、日天に似た菩薩形の貪狼星だけが踏割蓮華座に立っている。
- (12) このような隈取は東寺本や聖衆来迎寺本にも見られないが、これまで散見した中では広隆寺本系の像容を持つ愛知県・高蔵寺が蔵する、文安元年（1444）制作の十二天像のうちの伊舎那天に見ることができる。



※本研究は公益財団法人芳泉文化財団から助成をうけた「真長寺本十二天像の図像比較及び復元研究」（2011 年度）による研究成果です。また三輪隆證住職（真長寺）、中野英勝住職（西明寺）、見田隆鑑氏（日本学術振興会特別研究員）、石川知彦氏（龍谷ミュージアム教授学芸員）はじめ、多くの方々のご助力を賜りましたことを、厚く御礼申し上げます。